



本草綱目

上



本居乃翁玉の小指手法くつて源氏
物語註法秋也もあみそり多るまこと
らくそだまのまかひ其いそ緒一も家に
人々の系圖と志し傳を可也付一後
大いおやぐよといはのねまこも人の
刃もかきまこのたあま海くも一も
あう久は多めていった系圖と作
ゆほ一久は多めていった系圖と作
いあははまはあともあましあ一がうし

るも其いふる事一なるに
あはれむしとてや京臺半作の
うさあし一於ては
祿とらふは
その
思ふ
月
と

ら
な
年

は
は
は

北村久備

源氏物語系圖凡例

中より多まぬ源氏物語の系図を凡例としてありき
同じく今に其より一きに志しむるは改めら
るべきに古き系圖にかりりていふべきはたよりあり
あり

○卷の名と年号に於て源氏君の齡と年の教より
志しり源氏君の齡と年教よりたつた一考の中に教
年と合きたる事も所をばをりきん為あり但し
白文より下ハ其君の齡を用也

○中よりの系図に女と婦とをも男の末に識たり是
古く系図を志し凡例としていふれどもるるに依りて
これに今ハ其の次を多めりハ次をのちに志し
を次より記すといふて女と男の次よりぬ

○皇胤。大臣族卿大夫族系系あり人げ門をて類と
かひ其申よ名れ前後とまゝに始めて中より次第に
志しうふ又行状ありて名あり系系もあき人の系系
あき人のまゝにあらん

○名もあきまゝに行状もあき人にすまゝにまゝに且行状
ありとまゝに名のお徳よまゝに人々又ハ桐壺乃ま
の御ふまゝにきうぎりの女房はあき人まゝにまゝに
あきたるもまゝに又まゝ人のうへをまゝにせし
まゝにまゝにまゝに

○人々の母と人々の傳ふまゝにまゝにまゝに人
の傳も系系のあきハ別よにあらん
○人々の名の下に母上のまゝにまゝにまゝにまゝに
人々あり

○かやりの系圖は源氏君と六条院とまゝに源氏君
手前とまゝにまゝにたれど初まゝに人のまゝにまゝに
もあらば光源氏源氏とまゝにまゝにまゝにまゝに
かやりのまゝにまゝにまゝに

○人々の傳の中に月日まゝにまゝにまゝにまゝに
まゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに
まゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに

○人々の傳物傳の詞を書きまゝにまゝにまゝにまゝに
まゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに
まゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに

附ていふ

○此物語の帝乃降名朱雀院冷泉院とハ仙洞とまゝに
て後降名をまゝにまゝにまゝに朱雀院冷泉院とまゝに

昔有たる天子の御名を色に終りしはれど今く昔者
て子に唯つしるふはれは御名に相つたり御名に
ぬは内又は上とのことあり

○帝をそくめまをそくめくの名を相つりしはれど今く昔者
臺の帝より相臺まにもしるある帝なれば後小御名と
よむ人の其帝よりその料より名に相つたりその二御名の
詞は相臺帝よりそのいふ受人くの名は是より
大臣も御名も其人よりそのいふ受人の大臣何大納言と
よむ名に相つたりしはれど今く昔者

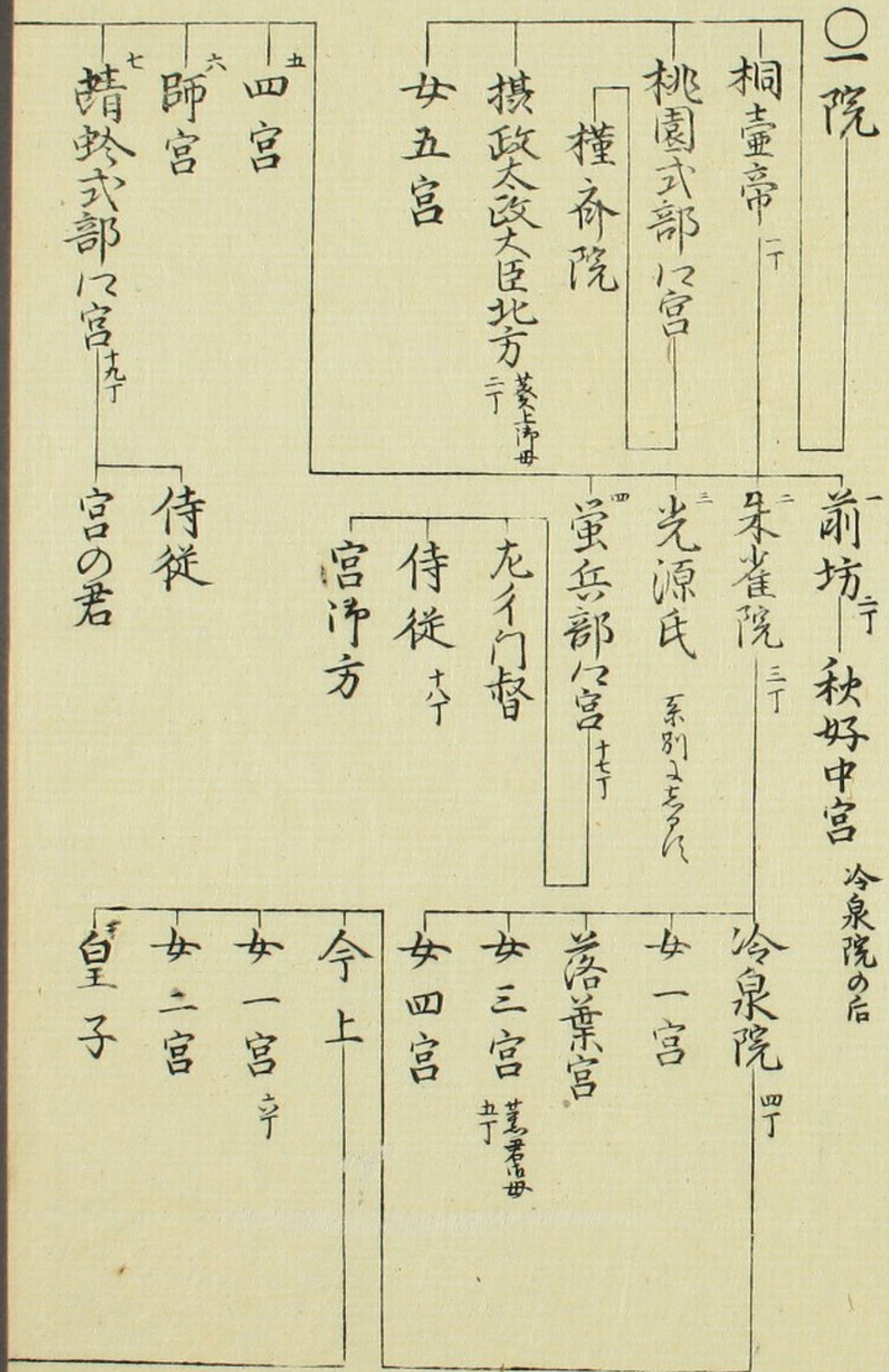
○かくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
おなせたる名も御名とよむ後の人より言ひしはれど今く昔者
つあり御名ぬくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
其名は御名とよむ人の御名は秋好中宮と

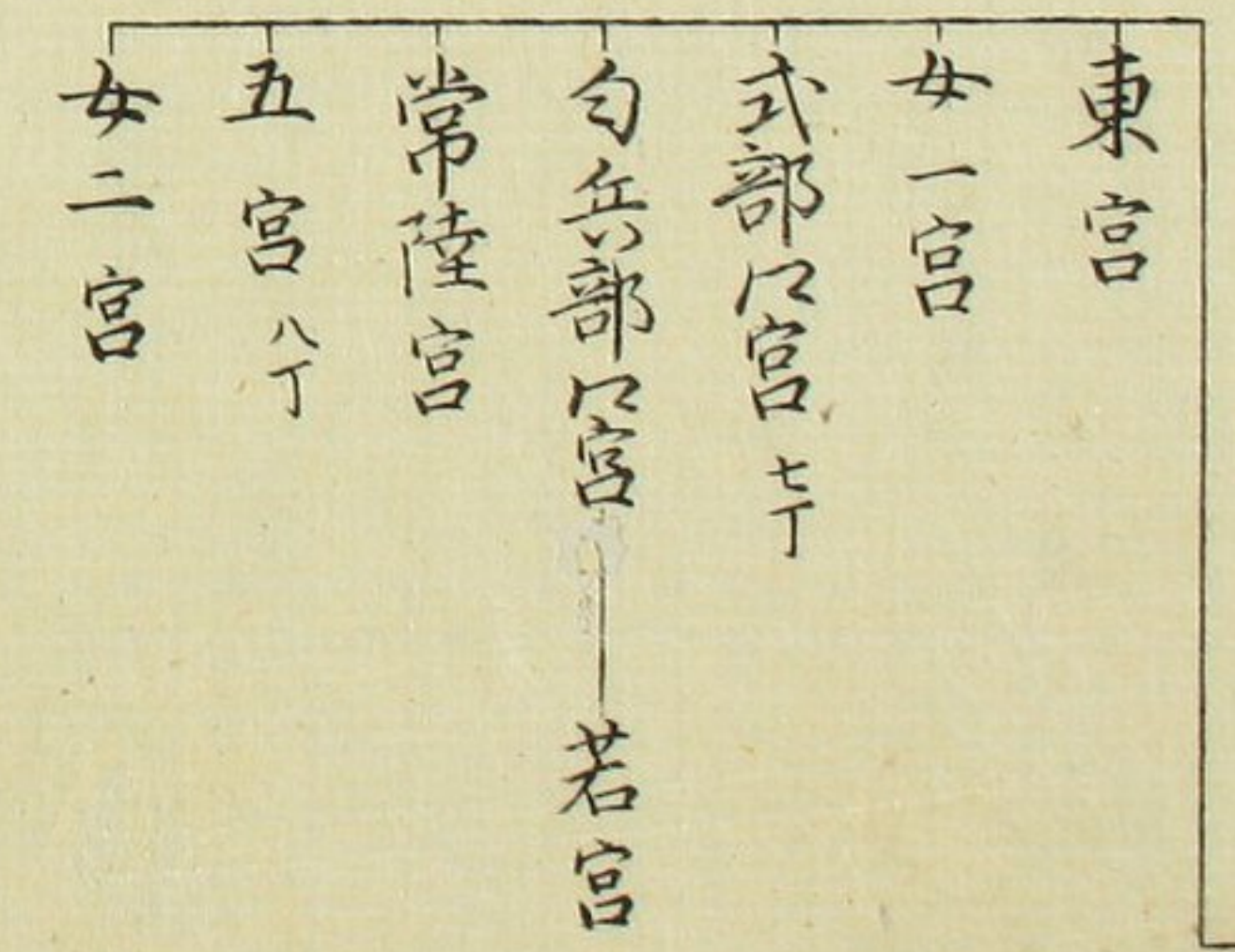
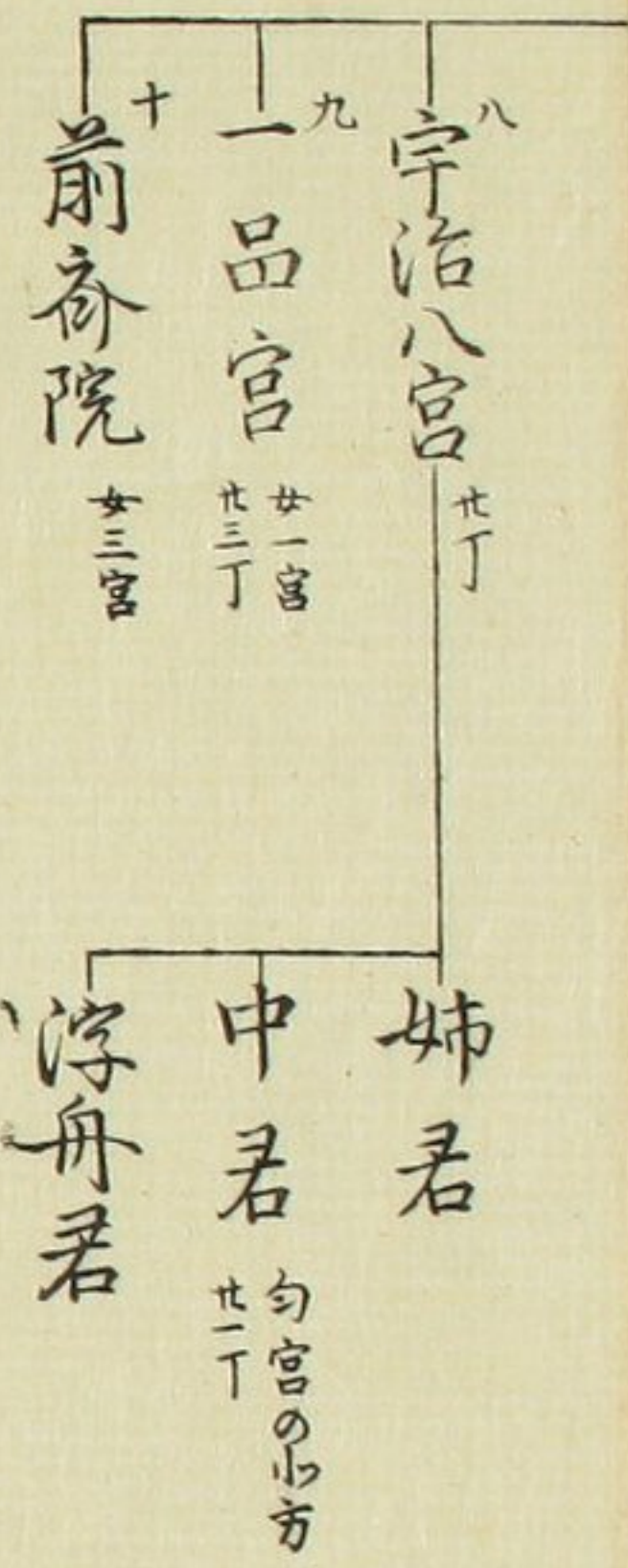
御院などくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
とのことして秋好といふく受權の御院も胡島の姫君とよむ
それハ胡島の女を源氏君とよむくくくくくくくくくくくく
胡島の女よりくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
不ぬくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
せしあり御名は是より

○くくくくの名を後より相つりしはれど今く昔者
御名よりしておなせしはれど今く昔者
その御名をまの御名も其人の名もくくくくくくくくくく
ゆき由富君などあり其御名にゆきゆき相臺帝
竹川た大臣御名は是より御名は是より

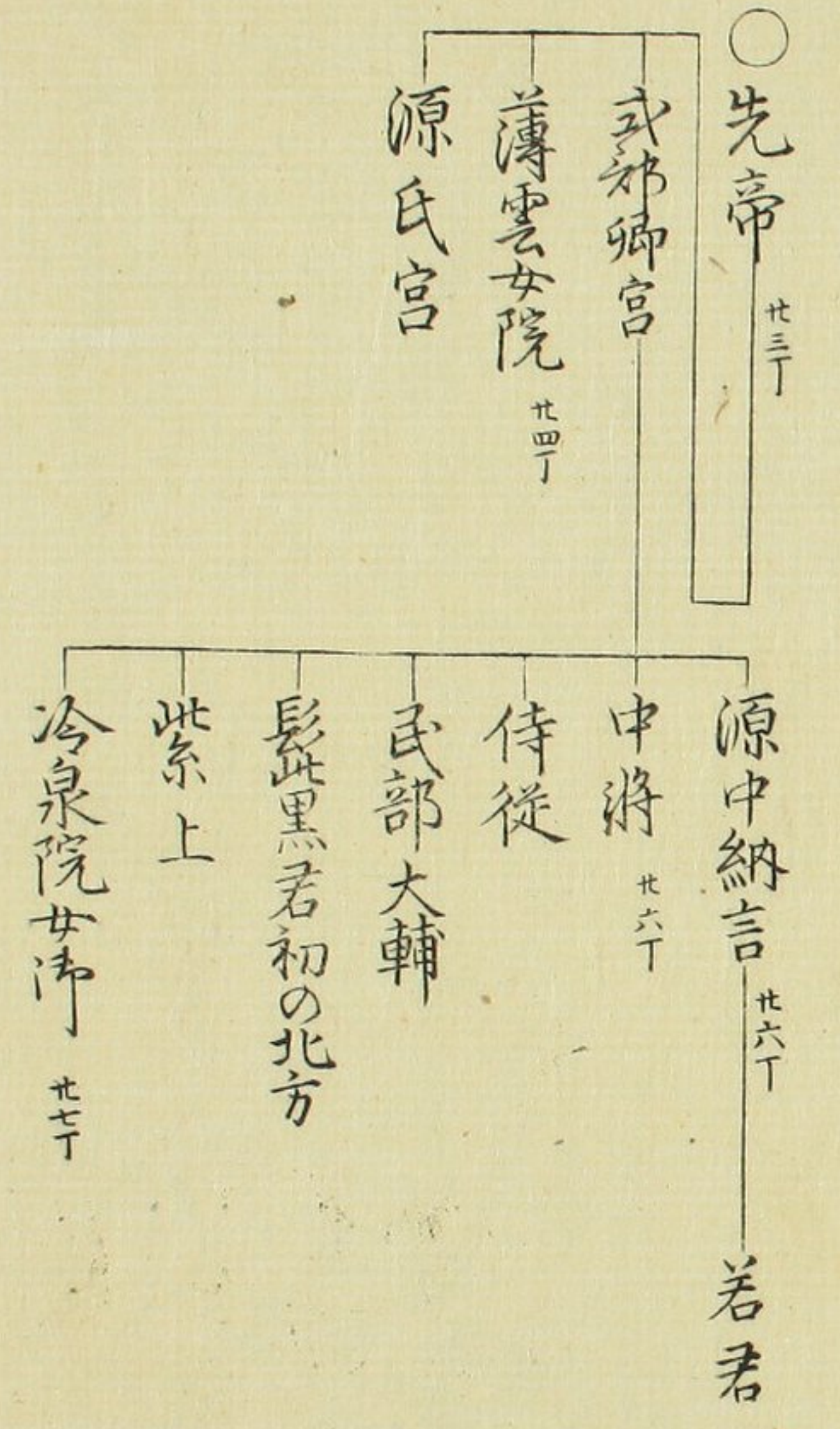
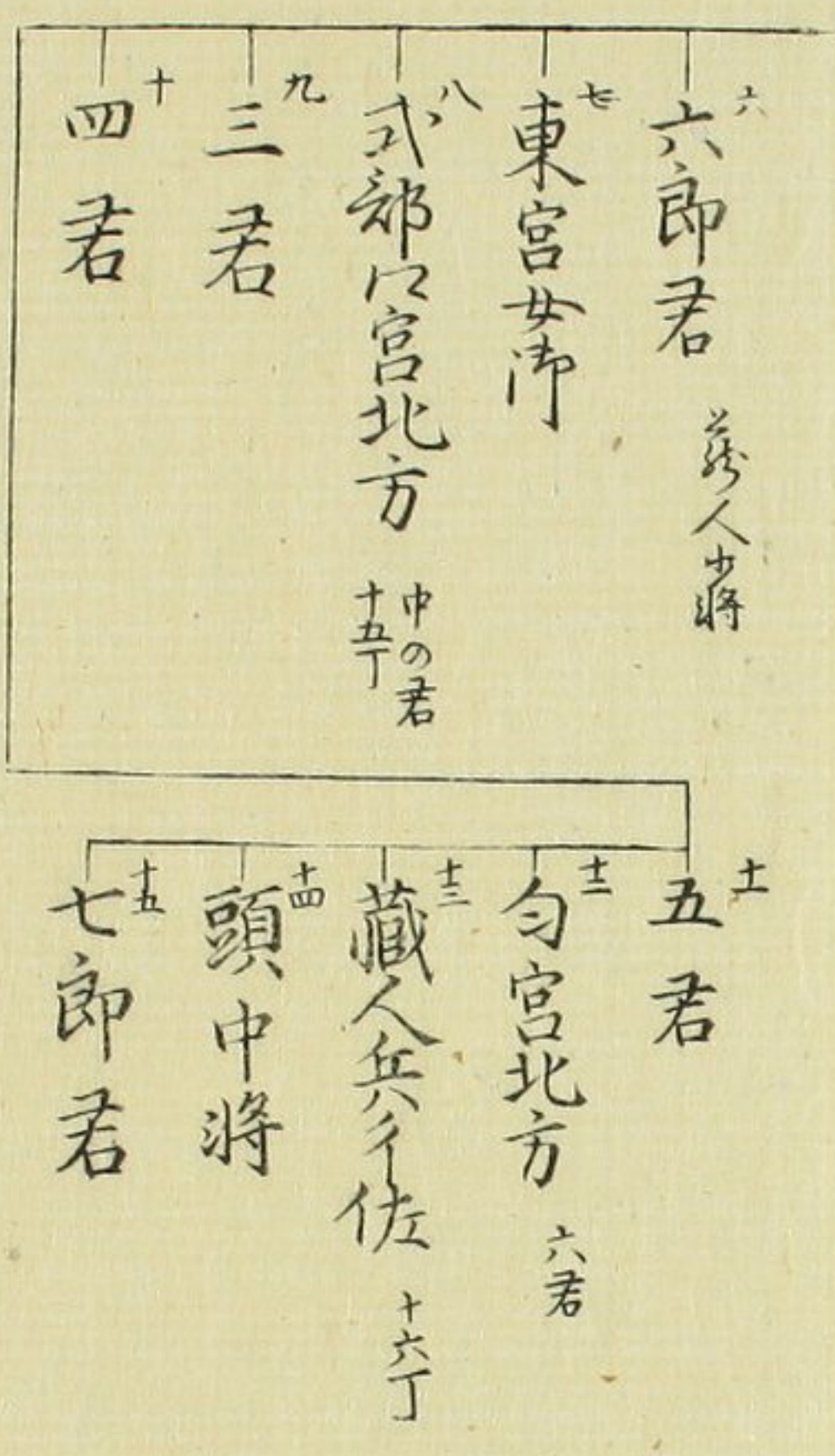
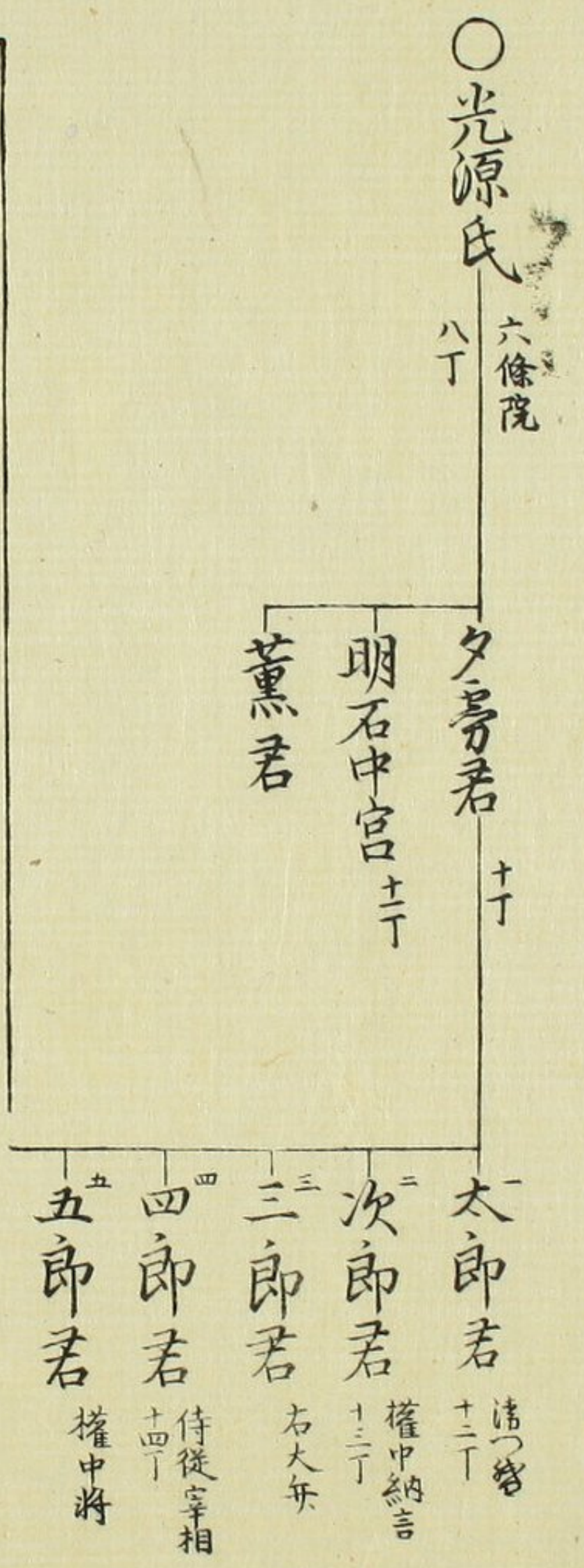
一系圖上畧圖

○皇胤





目一



○常陸宮 七十七

禪師君

末摘花君 七十九

○中務宮 七十八

父

明石入道北方 七十九

○大臣族

○攝政太政大臣 左大臣

三十一

致仕太政大臣 頭中將

左中弁 三十一

左門督 後大納言

權中納言 春宮大夫

葵上 三十一

柏木君 左門督

紅梅右大臣 後大納言

弘徽殿女侍 冷泉院の宮母

夕旁君北方 雲井君

鬘黒君北方 玉島君

近江君 三十一

麗景殿女侍 東宮にあり

中君 紅梅侍方

大夫

少納言 三十一

兵手佐 三十一

後侍從 三十一

大夫君 三十一

頭宰相 三十一

頭中將 三十一

藏人少將 三十一

八郎君 三十一

清乙子 三十一

左門督 三十一

藤宰相 三十一

○二条太政大臣 四十

大納言

弘徽殿太后 相室帝后

帥宮北方 四十

致仕太政大臣北方 四の君

五君

臈月夜内侍のり

頭弁

麗景殿女侍 朱雀院女侍

四位少將 四十

右中弁

○右大臣 甲三丁

鬘黒君 甲三丁

真木柱上 甲四丁

兼香殿女侍 朱雀院女侍

後中納言 二

頭中將 甲四丁

次郎君 甲三丁

左兵衛尉 三郎君

冷泉院女侍

右大弁 四郎君 甲六丁

内侍のくみ 中代君

頭中將 六

○大臣 甲七丁

六条清息所

○父 甲七丁

麗景殿女侍 桐壺帝女侍

花散里上

○大臣 甲六丁

明石入道 梅六丁

明石上 甲六丁

按察大納言 甲五丁

雲林院の律師

○父 甲七丁

常陸宮北方 多持花母

桐壺更衣 源氏君母

大貳の北方

○左大臣 甲七丁

女侍 冷泉院女侍

○左大臣 甲七丁

麗景殿女侍 乙の君 後主女侍 今上女侍 女三の君母

大藏卿 甲七丁

修理大夫

○大臣 甲七丁

宇治八宮北方 大君中君侍母

父 甲三丁 常陸女北方 浮舟君母

左中弁 弁の尼

○竹河左大臣 主下 — 三位中将北方

系圖下畧圖

○卿大夫族

○右ノ門督 辛六丁 — 空蟬君 伊予介の妻

右ノ門佐 小君

○伊豫介 辛五丁 — 河内守 紀伊守

藏人鞞負佐 右近將監

軒端の萩 伊予介の妻 辛六丁

○三位中将 辛六丁 — 夕顔上 玉首君の母 辛六丁

宰相 辛五丁 — 宰相の君

山阿闍梨 辛八丁

○宰相藤原惟光 辛八丁

少将命婦 辛九丁

三河守妻

兵衛尉 辛丁

藤内待のすけ 夕暮君の息人

○尼君 辛九丁

惟光の父のめの中

僧

○太宰少貳 辛九丁

夕暮上のめの中

豊後介 辛九丁

夕暮太

揚名介の妻 六丁

次郎 六丁

三郎 六丁

婦 おゆい

夕暮君 六丁

○播磨守 六丁

源良清 六丁

五節君

○按察大納言 六丁

女 紫上の母

○父 六丁

北山僧都

尼君 紫上の祖母

○父 六丁

少納言君

紫上のめの中

弁

紫上の女房 六丁

○兵部大輔 六丁

大輔命婦

源良名のめの中

○父 六丁

和泉前司

中納言君

朧月夜の女房

○太宰大貳 六丁

筑前守

五節君

源氏君をまひり人

○宮内卿の宰相 六丁

明石中宮の乳母

○按察大納言 六丁

五節君

乙女まくにさめ

○常陸介 浮舟君のまゝ父
六十六丁

一 藏人式部丞
二 源少納言妻
三 讚岐守妻
四 藏人右近將監
五 小君 六十五丁
六 左近少將北方

○大將 六十七丁
左近少將 常陸介のむこ

○父 六十七丁
女 左近少將の嫁せし人
妹 六十八丁

○父 六十八丁
左中弁
柏木君の乳母
中納言の乳母 朱雀院の女三女の
めい

小侍従 女三女の乳母

○父 六十九丁
一条淨息所 藤原家の内母

父
大和守
少將の君 藤原家の女房

○父 七十丁
大輔の君 宇治中君の女房
右近 口君の女房

○父 七十丁
姉
右近 浮舟君の女房
七十二丁

○大藏大輔仲信 七十三丁
大内記道定の妻

○父 七十三丁
因幡守
出雲權守時方

○父 七十三丁
阿爾梨 七十三丁
浮舟君の乳母 七十三丁
大とこ

○父
右馬頭

蜻蛉式部卿宮の後北方 宮の君のまゝ母

○父 七十三

横川僧都 七十四

尼君 右衛門督の女

常陸介の女

父 紀伊

○衛門の督 小野尼君の夫 七十五

中将北方

○父 七十五

中将 小野尼君の心

禪師の君

○父 七十五

阿闍梨 小野信都の男

少將の尼 小野の尼君の女

系圖 系圖ありて人系ありてくく其まゝの如く抄さるるなり

桐壺 七十六

帚木

空輝 七十七

夕顔 若紫 七十八 末摘花 七十九

紅葉賀 八十

花宴

葵

柳 八十一

花散里 八十二 須磨

明石

湊標 八十三

蓬生

閑屋

繪合

松風 八十四

薄雲

朝白 八十五

とと女

玉葛 八十六

初音 八十七

胡蝶

螢

常夏

篝火 八十八

野分

行幸

藤袴 八十九

真木柱

梅枝

藤裏葉 九十

若葉上

若葉下 九十一

柏木

横笛 九十二

鈴虫

夕霧

御法

幻 九十三

匂宮

紅梅

竹川

橋姫 九十四

椎本

總角 九十五

早蕨

寄生

東屋

九六丁

浮舟

九七丁

蜻蛉

九八丁

手羽白

九九丁

夢浮橋

○皇胤

○一院

紅葉賀巻

保氏君 十九

正月の条より

桐壺帝

桐壺帝即位のより

花宴と夢宴の間 保氏君 廿一 即位を東京に譲りてありの

させ給ふ 保氏の御よハ

林

日君 廿二

十月朔日崩

二十一日の条より 十月の条より 十月の朔日より 十月の朔日より

按 保氏の御よハ桐壺帝といふよりハ又ハ保氏は桐壺帝に譲りてありの
に之を帝をうけハ保氏の御よハ人乃 譲りたるに之を譲りてあり
ありさせ給ひて保氏の御よハ
院の御よハ譲り

前坊

秋好中宮の父宮夢孝に故院の清らうらのうらうらと
あやうらうら

桃園式部内宮

夢孝原氏君 北二 永院の只様の業に或るのまゝ

夢孝日君 三十二 三月薨

權永院

朝敵の娘君

弟永孝原氏君 十七 原氏君中川の若の四方たうの業式部内宮
の娘君に朝敵まかりしをいそとすことしちゆくめて
かゝるもつゆとて掛けりていそとす

棟孝日君 廿四 孝永院の腹めくありきせむひりねハ
あつりしはあつりハ

朝良孝日君 三十二 父宮の四肢よりありわさせむひ九月桃を

ふふとつり口をその女ふふとあひ住しあつりてはむひり

若菜下孝日君 廿七 夏の業に口くしあつりしむひり

めてしゆ

権の永院よりハ弟永孝に原氏君より朝敵まかりし
しゆとて棟孝に永院ハ口くしあつりしむひりハ
朝敵の娘君はつりに井多ひしむとて又朝敵孝に原氏君
より朝良とつりてあつりしむひりしむ権の永院よりハ後
つりしむ原氏君ありあつりしむ又弟永院ハあつりしむ
永院とつりしむハ又朝良孝に原氏君の娘君よりハ後
しゆとてしゆとてしゆとてしゆとてしゆとてしゆとてしゆとて
あつりしむしゆとてしゆとてしゆとてしゆとてしゆとてしゆとて

摂政大臣少方

夢上の母宮夕秀君の祖母
大宮

桐孝孝に内のひとつ辰後よふんかゝりねハ

藤孝孝原氏君 三十二 孝攝政うせむしを後口くしあつりし

孝孝原氏君 三十二 孝攝政うせむしを後口くしあつりし

乃孝^{三十七} 三月廿日うせり
夕孝君玉若君祖母の控を
あむるの事日せし

女五宮

朝良^{三十二} 二二 相良^{三十二} 二二
相良^{三十二} 二二 國の女に
きく女との事におはせし

藤坊

實に相良帝の侍

藤坊に^{相良帝} 故藤坊の事
い^{相良帝} 思ひ^{相良帝} せし
八月八日藤坊の
母を^{相良帝} 見し

秋好中宮

冷泉院の中宮 藤好^{三十二} 女侍
母六条侍息所大長女

入^{三十二} 中宮に^{三十二} 移し
九月十六日桂川の侍
藤好^{三十二} 母十四日母侍息所
藤好^{三十二} 母十四日母侍息所
藤好^{三十二} 母十四日母侍息所

藤好^{三十二} 母十四日母侍息所
藤好^{三十二} 母十四日母侍息所
藤好^{三十二} 母十四日母侍息所
藤好^{三十二} 母十四日母侍息所

藤好^{三十二} 母十四日母侍息所
藤好^{三十二} 母十四日母侍息所
藤好^{三十二} 母十四日母侍息所
藤好^{三十二} 母十四日母侍息所

藤好^{三十二} 母十四日母侍息所
藤好^{三十二} 母十四日母侍息所
藤好^{三十二} 母十四日母侍息所
藤好^{三十二} 母十四日母侍息所

早蕨廿五 二月廿五のちとて三条の橋より

女曰文

若菜上廿八 小つゝ女をたらふ入

今と

浄母兼善女浄慈恵右大臣妹
実ハ兼善院の白子

明石廿八 兼善の系に廿八 南代三三 右大臣の

兼善廿九 兼善の女浄乃廿九 服三三 男三三 女三三 女三三 女三三

ハ

遷標廿九 二月廿五日

梅枝廿九 二月廿五日

若菜廿九 浄母位

宣長公廿九 浄母位
相違帝廿九 浄母位

女一文

浄母弘徽殿女浄致仕太政大臣女

白廿九 故後仕のおわめ廿九 女廿九 女廿九 女廿九

た廿九 白廿九 女廿九 女廿九 女廿九

女二文

浄母兼善右大臣女

竹川廿七 四月

曾子

浄母右大臣

竹川廿七 女廿七 女廿七 女廿七 女廿七

ハ

東宮

浄母明石中宮源氏若女

若菜上廿八 三月十日

権守孝 廿七 二月廿日 神楽詣

徳蘭孝 廿四 八月廿六日 宇治の中君小名通初多小

早世歎孝 廿五 二月七日 中君と二条院小ひくうり多小

寄生孝 廿五 八月十六日 夕音君の六君においしむ

按白家まふ依の世人いかりふまむ
くわり中ねと夢みくひつげくま

若宮

清母中君之孫八三所女

寄生孝 廿五 二月二日 生れ多小

常陸宮

四の文
清母更衣

白文孝 二十 正月夕音君六条院中て賭弓のうり多小

中下ふいふ心のこ常陸の文と夢みくひつげくま

あつけいこふあうおしり多小 大ね夕音君より多小

まむけいひつろの文信もられふのこやといつ車よ

すひきののたまりてまふ多小

寄生孝 廿六 三月晦日 今上の後世の後まふふり多小

うらハこの文 白文 ひたらち乃ふたふくさつひ多小

五宮

清母更衣に口

白文孝 廿七 本文章

按寄生孝に中務まふくえたらハけまあふ一寄生孝イアあた
つま殿上に泣くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
源のちん人ゆふくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
ゆふくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
系つらまふく
考くくく

女二宮

後世の文
清母後世女清大長所女

寄生孝 廿四 夏清母女清うせり小今年女二の文四年

十四

口孝 廿六 二月廿余日 西のき又の目蓋君とあうとあふ小

四月三条乃文小あひりし

光源氏

二条院 源氏の甲の 寧ろの君 大納言 大納言
内大臣 大納言 大納言
母桐壺更衣 接奉大納言

桐壺を小生れり

門者 三歳 着袴門一年夏津母更衣せり

門者 七歳 四ふと初て後帝けしこを源氏小生れくおきてり

年立六福の

門者 十二歳 之後之世引入の大位の子に退おた大位の子葵

上りといひかゝに多りりふけし二条院を造り

桐壺をいと帯本をの問 十二歳より十三歳との問より 申す小生り

帯本をにまゝ申す

紅衣を授けり 十六歳 十月十余日正三位に成り

門者 十九歳 七月寧ろお小成り

花宴をいと夢をの問 廿二歳 大将小成り

あ人もはさしむわされてまゝ

次子 廿六歳 二月末つゝ次子よりり

明石 廿七歳 二月十二日明石の入及夢の告小たり 弘くとい

して明石の歌も揚り

門者 廿八歳 七月廿五日宣旨下りて西陽院二条院より

正位にたまりて権大納言に成り

遷標 廿九歳 二月内大臣に成りしは二条院の東院を造

らる秋任を造

園屋 廿九年 九月晦日石山詣

鎌倉 三十歳 春晴儀の浄堂を造り

松風 卅一年 二条院の東院造りて花散里上を造り

り

藤原 三十二歳 秋左政大臣に成りしはきりて宣旨をい

しきふ

夏元後清苦めて庭上よりやうて二条の
東院よりあきふ附大寺子寮に入りふと年十月のまじりつて
並夜ふとさゆりゆらゆらゆらゆらして桑のあきと後花散里
の上にあつつけらるる又のまじりつて

二月廿五日 兼養院の日のまじりつて
多して進士ふぬきと年終の司正に侍候ふ

秋のまじりつて仲秋の君と
玉鬘曼珠 二十五 秋のまじりつて仲秋の君と
あつて言まふ月五日の
あつて言まふ月五日の
あつて言まふ月五日の

秋のまじりつて仲秋の君と
兼養院の系圖小胡蝶まじりつて
あつて言まふ月五日の

秋のまじりつて仲秋の君と
兼養院の系圖小胡蝶まじりつて
あつて言まふ月五日の

十二月のまじりつて
やうて二条のまじりつて
あつて言まふ月五日の

十二月のまじりつて
あつて言まふ月五日の

十二月のまじりつて
あつて言まふ月五日の

十二月のまじりつて
あつて言まふ月五日の

十二月のまじりつて
あつて言まふ月五日の

十二月のまじりつて
あつて言まふ月五日の

十二月のまじりつて
あつて言まふ月五日の

十二月のまじりつて
あつて言まふ月五日の

凌標保氏若 三月十六日明石中しれぬ

松尾口若 秋明名上 母上具一糸一せて入洛大舟の

家二位口若 二月二條院よりむらひ母上とまひひもあつて

梅枝口若 二月四條若

後重口若 四月廿五日

若菜口若 二月十五日

出法口若 二月十五日

白文口若 冷泉院

柏本口若 二月

又秋の条より右連申ぬ

三月

二月

二月

薰右大将

源氏後 四位の信俊 源中好 兼中好 源中細

Handwritten notes on the left page, including names like 白文, 冷泉院, 柏本, and dates.

うーい

寄生書 11年 九月廿一日定路おどり多しお公家の孫殿と
山寺に梅して浄堂造るものと投り

11年 二月廿日辰大納言成右左衛門をひまふ口

一月廿一日今日よの女二と流すりまふ

東屋書 11年 定路の浄堂造りておぬらうーい

梅白あまきよにり上例の世人あまきよにり中おしつらうーい
つげくまきよにりおのりまきよにりおのりまきよにりおのりまきよにり
おのりまきよにりおのりまきよにりおのりまきよにりおのりまきよにり
おのりまきよにりおのりまきよにりおのりまきよにりおのりまきよにり
おのりまきよにりおのりまきよにりおのりまきよにりおのりまきよにり

左衛門

左衛門書 11年 母二系上 榎井 紋仕太政大臣女

父方書にーい 梅白あまきよにり上例の世人あまきよにり中おしつらうーい
つげくまきよにりおのりまきよにりおのりまきよにりおのりまきよにり
おのりまきよにりおのりまきよにりおのりまきよにりおのりまきよにり
おのりまきよにりおのりまきよにりおのりまきよにりおのりまきよにり
おのりまきよにりおのりまきよにりおのりまきよにりおのりまきよにり

若菜下書 11年 正月廿一日余自余雀院今山愛の武楽の日

乃余云たたおのり高横笛吹をてすのふふふふ

あふふふ又十二月同日一試案に為時音ふふふ

白あまきよ 21年 父方書 賭ろのうーい

院おてあふふふ系にーい 父方書 山子のあつて中納言

右大舞あふふふ上達部れはあまきよにりいさあひ

たてーい系流へおのり

絶角書 11年 十月廿日白あまきよにり定路きてお案又

ーい系にりお案相ひは乃唐つ書にりーい

ねーいらうーいーいさあひてあまきよにり

次所若

権中納言 11年 母二系上 榎井 紋仕太政大臣女

夕方書にーい 梅白あまきよにり上例の世人あまきよにり中おしつらうーい
つげくまきよにりおのりまきよにりおのりまきよにりおのりまきよにり
おのりまきよにりおのりまきよにりおのりまきよにりおのりまきよにり
おのりまきよにりおのりまきよにりおのりまきよにりおのりまきよにり

門まゝ山りふこの君は高君らひんりの御上飛騨里小まもり
つぎいでりつぎまもりまゝ若菜下まゝふりまゝの御上はかくとらひ
内侍のナケらるけ君とせらふ
ゆへてまゝつぎいへまゝ

若菜下まゝ保元君 四十七十二月兼崔院のふ十四夜の御樂了白
康章保元君 四十七兼崔院のふ十四夜の御樂了白

白まゝ二十正月賭弓のつうらうの御まゝ和文書

三節君

右大弁
山母三条上

夕秀まゝ二十二月廿九日按在まゝふりまゝの御上の御まゝ和文書

若菜下まゝ保元君 四十七十二月兼崔院のふ十四夜の御樂了白

歳末保元君 四十七兼崔院のふ十四夜の御樂了白

白まゝ二十正月賭弓のつうらうの御まゝ和文書

権中まゝ和文書二月廿九日和文書白まゝ和文書初瀬詣の御まゝ和文書

夕秀君 四子の二を右大弁侍従の宰相権中ねり少將孫人の
玄勝和文書中と皆まゝ和文書の御まゝ和文書

四節君

侍従の宰相
山母三条上

夕秀まゝ二十二月廿九日按流布の系若菜下まゝの御上の御まゝ和文書
初瀬詣の御まゝ和文書初瀬詣の御まゝ和文書

権中まゝ和文書二月廿九日和文書白まゝ和文書初瀬詣の御まゝ和文書

五節君

権中ね
山母三条上

夕秀まゝ二十二月廿九日按権中ねとふりまゝの御上の御まゝ和文書

権中まゝ和文書二月廿九日和文書白まゝ和文書初瀬詣の御まゝ和文書

寄生まゝ和文書八月十六日和文書白まゝ和文書初瀬詣の御まゝ和文書

父かゝのまゝ和文書初瀬詣の御まゝ和文書初瀬詣の御まゝ和文書

は君也

六節君

君人の名は將 三位中納言 幸成守

夕芳君に

按 夕芳君はよふふの弟 君を以て たらふくは日守君よは

竹川君云 君人の名はとふひー三條殿の四振也 是君 たらふくもひきこーしと云うーしと云ふ云々

権甲君

君 白を初は家初 権甲君はさうさうひきこふ

竹川君

君 又よふおぬありーしと云うの仲はとふひて 是くありと云う口事 日守 頼家相小ぬふふ

誓志の山

冷泉院の 小むををー人

東宮の女侍

大服君 女侍の君 日母三條上

君はよふふの三條殿の君の女侍と云ふに云々 是くありしは君の女侍と云ふに云々 小むをを

夕芳君に

白をきくはよふ大姫君は東宮 今上の 東宮 よあり多ひて又きー ちよふ人たうきさほめてさうひきこふ

式部は宮の女侍

中の君 日母三條上

夕芳君に

白をきくはよふ二条 今上の二条殿 式部は おあーおの 六條殿 孫殿 と時々のさやけよふ女志多ひて右のお白いもの 夕芳君 中納言 君をえをり多ひ

三の君

日母後内侍

夕芳君よふふ三の君 次守君もひんーのおと 花散里上 ちよふとらひきこふーしと云ふり多ひ

四の君

日母三條上

夕芳まゝの山

六の君 四母二条上

夕芳まゝの山

白兵部公家の山方 六の君 四母二条上

夕芳まゝの山

白文まゝの山 一糸文 善 善いふふふふふ 善 善まゝに善ま

夕母のまの山

総角まゝ 廿四 秋の糸まゝの山 秋の糸まゝの山 秋の糸まゝの山 秋の糸まゝの山

けりまゝの山 けりまゝの山 けりまゝの山 けりまゝの山

白まゝの山 白まゝの山 白まゝの山 白まゝの山

早蕨まゝ 廿五 二月廿五日 菅原君

寄書まゝ 廿年 八月十六日 白まゝの山 白まゝの山 白まゝの山 白まゝの山

二之 二之 二之 二之

按ひて男のまゝの山 按ひて男のまゝの山 按ひて男のまゝの山 按ひて男のまゝの山

花人まゝの山

権まゝ 廿二 二月廿二日 白まゝの山 白まゝの山 白まゝの山 白まゝの山

四子の君まゝの山 四子の君まゝの山 四子の君まゝの山 四子の君まゝの山

あまの山 あまの山 あまの山 あまの山

竹川まゝの山 竹川まゝの山 竹川まゝの山 竹川まゝの山

花宴亭小女の日記

夢見 十二 月一日の夜 夢見もあつて 辰後の女と交りぬ

柳 廿四 其の夜より 柳の夜に 辰後の女と交りぬ

一月六日 朝の夜 辰後の女と交りぬ

○先帝

相毒亭の日記 辰後の女と交りぬ

式部公宮

相毒亭の日記 辰後の女と交りぬ

辰後の女と交りぬ 辰後の女と交りぬ

日記 廿三 月一日の夜 夢見もあつて 辰後の女と交りぬ

花宴亭

相毒亭の中 辰後の女と交りぬ

相毒亭の日記 辰後の女と交りぬ

柳 廿四 其の夜より 柳の夜に 辰後の女と交りぬ

源中納言

九五清徳

後裔 源氏君 三十七 より小成勢に文の九清徳ハとの上 はと せん
 らうらそか まを おうらう君小成を まを 一人 まを
 梅枝のき小成名雅君の入内 まを のま まを け まを け まを け まを け
 うせり小成より まを け まを け まを け まを け まを け まを け
 宰相中納言 まを け まを け まを け まを け まを け まを け
 赤にち まを け まを け まを け まを け まを け まを け

若菜下 まを 小源中納言 まを け まを け まを け まを け まを け

若君

若菜下 源氏君 四十七 十一月 舞臺院 評加笑の武楽の系 まを 成 まを け
 文のま清のこと まを け まを け まを け まを け まを け まを け
 まい まを け まを け まを け まを け まを け まを け

中將

侍従

氏部左補

志本 まを け まを け まを け まを け まを け まを け
 け まを け まを け まを け まを け まを け まを け
 おい まを け まを け まを け まを け まを け まを け
 け まを け まを け まを け まを け まを け まを け

源氏長者の御方

母今の御方 まを け まを け まを け まを け まを け

後裔 源氏君 三十七 より小成勢 まを け まを け まを け まを け まを け
 成勢 まを け まを け まを け まを け まを け まを け
 のう まを け まを け まを け まを け まを け まを け
 ま まを け まを け まを け まを け まを け まを け

ともめき 河内君 夏の衆よりいなき初日のまをまへし今いふ初
 りまてけい出附 く ちむいもあまはさるふよてふいりあむしめ
 はいりりてあうあう おぬやま ああ く 王女降いでううい
 多とまき

○常陸宮

西父かこほりあひ

末摘花きく小友常陸のきこころん也

禪師君

醍醐の巧園家

蒼生まき まつむすの君の りせうとの禪師の君とてん也

初まき 末摘花の君の たこのころまりの君は出つひー伝ると
 きぬとゆいえぬひ伝らてあんふまぬをまへきまうー後
 さむく竹るとあへまふいんとふりうまはせしんんんん

抄小のまの君のあまのさきいりへいまやこの酒はあ若のあまのさきいりへいまや
うてはあまのさきいりへいまやこの酒はあ若のあまのさきいりへいまや

末摘花君

常陸宮の君

末摘花き 河内君 まの衆よりいなき初日のまをまへし

りと 大輔の 今ぬ そのつわりにかうあへんれはあらぬのこもや
 まひき あまのさきいりへいまや その秋係が君小童とあま あまのさきいりへいまや

あまのさきいりへいまや あまのさきいりへいまや あまのさきいりへいまや
あまのさきいりへいまや あまのさきいりへいまや あまのさきいりへいまや
あまのさきいりへいまや あまのさきいりへいまや あまのさきいりへいまや

茶を煮にほよ東の流より小町も福しめあしるす

按て茶の煮居と流布の系もよる茶の煮には茶居の身をくら
しく煮られはちうし未掃茶とては未掃茶をに割川りきたる
あしあまこのまつむ花をゆふれあまはちて茶の煮よも茶居の
まもわ寄せらるるてあまうしまに彼まつむをのれれけに折あり
まのこりらるらまをゆれあれらるるは又まつむ茶の居あすれ
まのこりらるらまのまつむをのりりらるるをあらしれはま

田文流しあ

○中務のま

松風まにりふひり上るる君のほけちち中務のま
らるらるらるらるら大井川のまらるららるらるら

父

按小氏松風を備してひらりや松風まに中務のまの居居のれり人々
まのこりらるらまにちるく人の相小まの由りこちをくふらのれり
左氏松風のまのま小まのまらるらるらまのまをくまをくま

指しあ

「入乃播磨の山方」明石上の母尼君

松風ま小石の上小具けあまより大井のまよすむ
若菜上ま你氏系
四十一 尼君とて六つあま

後小太菜
陸上流る

○大臣族

○攝政を改る

引継ぎの印々

たまた 改仕の印々

源氏右の印々 夕芳君の外祖父

相承る源氏君 十二元徳の末より引継ぎの印々とも

柿ま

保食君 北五

其の系よりよたのおともしも御やけ私引た

たの世の有りさ由よりのうくおわして改仕の系よりよ

とさなひくしちひさせたむらよとせめてくさひすひ

てこのりおまひぬま

源標

北九

二月冷泉院即位しひて後を改る

攝政しひる

源の系

北三

まろくせり

致仕を改る

其の系より引継ぎの印々 夕芳君の外祖父

母相承る系

相毒をふりしは子ともあまこころにのり申すはのほろ
いづれ人のおぼめてしと若うあきと右のおとめの中
いづれ福とえさうくもつらうしきりしはの若
く運せりおとめはてうしきたるはつらまわ
きしつらむいともおんま
帯束を小政中ねとて也

紅葉かたき 源氏 十八 十月十日日暮若院（若葉の夜西の位下

小政中

葵を 口君 廿二 位中ねとて申

須磨を 口君 廿七 冬の糸にしみ大敷の位中ねいとて申お

小あつて 口君 廿九 申す

渡標を 口君 廿九 二月の糸にしみ申おね格中ねとて申す

薄雲を 口君 廿二 秋の糸に大納言おて右大ねくけりよとて申す

ととめを 口君 廿三 よしお大ね内大言とて申すひね申すのよとて申す

いづれ 口君 廿九 秋を改大言とて申す

若葉束 口君 廿九 よしおあまのひね申すのよとて申す

わらひぬ 口君 廿九 申すにちの

白く 口君 廿九 申すにちの

に 口君 廿九 申すにちの

わらひぬ

た申す

若葉束 源氏 十八 三月源氏若葉束のよとて申すのよとて申す
わらひぬ 源氏 十八 よしおあまのひね申すのよとて申す
た申す 源氏 十八 よしおあまのひね申すのよとて申す
わらひぬ 源氏 十八 よしおあまのひね申すのよとて申す

とくあまき 海氏君 二十三日より一月の大敵 彼は君の君をたのふゆか納まふ
依竹後妻あまきりよとてあまきりよとてあまきりよとてあまきりよとて
於嬢き 口君 二月申納まふ 口君 二月申納まふ 口君 二月申納まふ
あまきりよとてあまきりよとてあまきりよとてあまきりよとてあまきりよとて

海氏君 秋 二月申納まふ

若菜上まき 口君 二月申納まふ 口君 二月申納まふ 口君 二月申納まふ

若菜下まき 口君 二月申納まふ 口君 二月申納まふ 口君 二月申納まふ

まきりよとてあまきりよとてあまきりよとてあまきりよとてあまきりよとて

柏木まき 口君 二月申納まふ 口君 二月申納まふ 口君 二月申納まふ

柏木本居くくく柏木まきにうせまきりよとてあまきりよとてあまきりよとて
故嬢まきにはまきのあまきりよとてあまきりよとてあまきりよとてあまきりよとて
まきりよとてあまきりよとてあまきりよとてあまきりよとてあまきりよとて
の福小の君のあまきりよとてあまきりよとてあまきりよとてあまきりよとて

毎の少ぬ 次年 大敵 毎の君 柏木大納ま

母 柏木君小口

柏木君大敵

柳まき 口君 夏の日まきりよとてあまきりよとてあまきりよとてあまきりよとて

口子のまきりよとてあまきりよとてあまきりよとてあまきりよとてあまきりよとて

あまきりよとてあまきりよとてあまきりよとてあまきりよとてあまきりよとて

あまきりよとてあまきりよとてあまきりよとてあまきりよとてあまきりよとて

あまきりよとてあまきりよとてあまきりよとてあまきりよとてあまきりよとて

あまきりよとてあまきりよとてあまきりよとてあまきりよとてあまきりよとて

あまきりよとてあまきりよとてあまきりよとてあまきりよとてあまきりよとて

あまきりよとてあまきりよとてあまきりよとてあまきりよとてあまきりよとて

あまきりよとてあまきりよとてあまきりよとてあまきりよとてあまきりよとて

あまきりよとてあまきりよとてあまきりよとてあまきりよとてあまきりよとて

あまきりよとてあまきりよとてあまきりよとてあまきりよとてあまきりよとて

あまきりよとてあまきりよとてあまきりよとてあまきりよとてあまきりよとて

あまきりよとてあまきりよとてあまきりよとてあまきりよとてあまきりよとて

柏木君 毎の湯ま

あし 車 取くの方小のせく 木 又多ひりりき 柏本そに柏本若

くわ葉よもた大冬の前とこも 竹虫き八月十六夜 冷泉池へあつて 葉のり

もた大冬とあり夕音き小冬の前とつりて 葉葉あまをけ 竹のり

竹虫きに大冬とこも 竹のり 遊月抄に柏本若のり

○年志れは 大綱をよ 竹川き 葉若十五六の夜の事

白雲の地味法の家につく 大綱をたつこ 竹川き 葉若十五六の夜

後大綱をよ 竹川き 葉若十五六の夜

竹川き 葉若 秋の葉につく 大綱をたつこ 竹川き 葉若十五六の夜

○年志れは 大綱をよ 竹川き 葉若十五六の夜

白雲の地味法の家につく 大綱をたつこ 竹川き 葉若十五六の夜

後大綱をよ 竹川き 葉若十五六の夜

竹川き 葉若 秋の葉につく 大綱をたつこ 竹川き 葉若十五六の夜

○年志れは 大綱をよ 竹川き 葉若十五六の夜

白雲の地味法の家につく 大綱をたつこ 竹川き 葉若十五六の夜

後大綱をよ 竹川き 葉若十五六の夜

竹川き 葉若 秋の葉につく 大綱をたつこ 竹川き 葉若十五六の夜

○年志れは 大綱をよ 竹川き 葉若十五六の夜

白雲の地味法の家につく 大綱をたつこ 竹川き 葉若十五六の夜

後大綱をよ 竹川き 葉若十五六の夜

竹川き 葉若 秋の葉につく 大綱をたつこ 竹川き 葉若十五六の夜

○年志れは 大綱をよ 竹川き 葉若十五六の夜

白雲の地味法の家につく 大綱をたつこ 竹川き 葉若十五六の夜

後大綱をよ 竹川き 葉若十五六の夜

竹川き 葉若 秋の葉につく 大綱をたつこ 竹川き 葉若十五六の夜

○年志れは 大綱をよ 竹川き 葉若十五六の夜

白雲の地味法の家につく 大綱をたつこ 竹川き 葉若十五六の夜

後大綱をよ 竹川き 葉若十五六の夜

て凡の白り屋の扱ふより其のしに下やまひきりて其のまゝに
 ぶふまうりやりのしにあり

大吏

母松根上登屋右大臣女

御前まふるも かえり

弘徽殿女侍

冷泉院廿二文の母 廿二文の女侍
 母松本君小付

浅原保氏君 廿九

二月寧ろお中ね 被仕屋 松中納言よりあつり

四君の由もらの姫君十二はあつり と内よあつり

あつり 保氏君 三月松合のしに右方へ

繪合ま 保氏君 三十一

竹川まに女二文の女侍とく

夕暮れた大長のお方

聖の君 三束の上 二束のお方
 母今の様松本大納言のお方

よとくま 保氏君 三十二 よりお女侍と今二束とあつり か

ありいらあつりてあつり お

京の大納言のお方 お

く お

とてとりとあつり お

ま お

とと お

く お

よりて大 お

お お

あ お

て お

白 お

あ お

後ひろく

按てお尋の居りし名お徳上ハてんは天とかく居舟一五ハとてお尋
小夕若君とまひしくお尋の居りし名とてハてんは天とかく居舟一五ハとてお尋
てんは天とかく居舟一五ハとてお尋
ありてあり

賢思右大臣小方

お尋尚侍 かんの若
母夕教上三位中お女

お尋若君は若田屋若君の乳母の夫の少部上果して流筆
あり十策の時お尋死して口を^{保中若}お尋若君^{二十}お尋若君とて
そりりけし三月肥後のちまの監ををりて肥前へ来り
四月廿日の御に肥前へお尋若君とて^{保中若}お尋若君とて
遠くへ来りしお尋若君の御に^{保中若}お尋若君とて
八幡少部へ又お尋若君とて^{保中若}お尋若君とて
そは右邊へお尋若君の御に^{保中若}お尋若君とて
十月六日院へお尋若君とて^{保中若}お尋若君とて

お尋^口お尋若君とて^{保中若}お尋若君とて

お尋若君^口二月十六日當若君日父内府^{大位}お尋若君とて

若君若君^口秋内侍^{保中若}お尋若君とて

若君若君^口お尋若君とて^{保中若}お尋若君とて

お尋若君^口正月内へ来りしお尋若君の御に^{保中若}お尋若君とて

お尋若君^口又三位小教にやうて内侍りお尋若君の御に^{保中若}お尋若君とて

お尋若君^口お尋若君とて^{保中若}お尋若君とて

竹川若君^口夏内侍の^{保中若}お尋若君とて

お尋

按てお尋若君は保中若君の御に^{保中若}お尋若君とて
お尋若君とて^{保中若}お尋若君とて
お尋若君とて^{保中若}お尋若君とて
お尋若君とて^{保中若}お尋若君とて

お尋若君

お尋若君の御に

美奈下等源氏君 四月の末に山崎 登るのふりくく
こかりしを思ひて山崎 もた大舟改宰相山崎 の車
の方にのせく山崎 え多ひりりま

抄改宰相いづるは美奈おとせけるを字一清り多きや入木其き小舟
の舟の若くは美奈おとせけるはなるかや一つとまきつら美奈お
よめた一うかひ
○一平系馬小舟をきく源氏君の冷泉院へありき小舟に在馬の登及宰相
又ころな馬登と宰相小舟をきくは源氏君の口人ともいひ及宰相はころな
改宰相おとせけるは四月折の舟小舟改宰相の舟系馬おとせけるは
又再往をきくは舟を抄するに源氏君の舟小舟改宰相の舟系馬おとせけるは
又宰相おとせけるは別人ともいひころな馬登と宰相おとせけるは
改宰相おとせけるは是よりころな馬登と宰相おとせけるは
○数世の舟をきくは源氏君の舟系馬おとせけるは

改申ね

幻書源氏君 十月大舟改宰相の君を改上して源氏君の舟系馬
系りきくは改宰相小舟の舟を改上して源氏君の舟系馬おとせけるは

源人の抄ね

夕暮書源氏君 又改宰相大舟より源氏君の舟系馬おとせけるは

心よりつらきと改宰相小舟の舟を改上して源氏君の舟系馬おとせけるは
改宰相小舟の舟を改上して源氏君の舟系馬おとせけるは

源氏君の舟系馬おとせけるは改宰相小舟の舟を改上して源氏君の舟系馬おとせけるは

八節君

梅根書源氏君 四月男崎の舟系馬おとせけるは改宰相小舟の舟を改上して源氏君の舟系馬おとせけるは
改宰相小舟の舟を改上して源氏君の舟系馬おとせけるは
改宰相小舟の舟を改上して源氏君の舟系馬おとせけるは
改宰相小舟の舟を改上して源氏君の舟系馬おとせけるは

山崎子

美奈下等源氏君 十月末紫書源氏君 十月末紫書源氏君

いふと奉りしる福小おんきか〜
世らにわの〜
此節君と日人の〜
去るせり知れし〜

九傳の傳

後宰相

寄生書 廿五 八月十日白き紙に
その〜日の条に〜
後宰相と〜

抄と〜めま〜
十條〜
此抄の〜

○二條右政大臣

兼菅院外祖父

桐菴書 源氏 君主 二右大臣と〜

棟書 九四 二右大臣と〜

明石書 九七 夏うせ申ふ

流布の系に〜
桐菴書より〜

大納言

柳書 二〇 中又書

政の毎

柳書 九四 新源氏若雲林院二三日〜
了中〜
の政の毎〜

後の左段は居あはれの方より一ちりして後の方と申す一と御月持のつり
左段は居あはれの方より一ちりして後の方と申す一と御月持のつり
○世思ふやうな御月持に居あはれの方より一ちりして後の方と申す一と御月持のつり
よきしといふ御月持に居あはれの方より一ちりして後の方と申す一と御月持のつり
くひけらちよる御月持に居あはれの方より一ちりして後の方と申す一と御月持のつり
格なりと申す一と御月持に居あはれの方より一ちりして後の方と申す一と御月持のつり

兼香殿女侍

兼香院の女侍 今上の御母

明の御母 御母君 廿八 喜の条よりいふ南代院の二に右左段の御女兼

香殿の女侍の御後男 今上 ちりして後の方と申す一と御月持のつり

いふといふ御母

若菜下 御母君 廿六 右左段よりいふ南代院の二に右左段の御女兼

のまつりまつりまつり 御母君 廿六 右左段よりいふ南代院の二に右左段の御女兼

つ多 御母君 廿六 右左段よりいふ南代院の二に右左段の御女兼

とこの御母 御母君 廿六 右左段よりいふ南代院の二に右左段の御女兼

御仲ね

柳 御母君 廿四 喜の条よりいふ南代院の二に右左段の御女兼
意い別 御母君 廿四 喜の条よりいふ南代院の二に右左段の御女兼
後つち 御母君 廿四 喜の条よりいふ南代院の二に右左段の御女兼
ま 御母君 廿四 喜の条よりいふ南代院の二に右左段の御女兼

美木柱上

美木院の女侍 今上の御母

梅 御母君 廿七 喜の条よりいふ南代院の二に右左段の御女兼

く 御母君 廿七 喜の条よりいふ南代院の二に右左段の御女兼

若 御母君 廿七 喜の条よりいふ南代院の二に右左段の御女兼

紅 御母君 廿七 喜の条よりいふ南代院の二に右左段の御女兼

れ 御母君 廿七 喜の条よりいふ南代院の二に右左段の御女兼

巧をせまりしつゝさこそころせまひて後
お前をたすけ給ふ
 まひしつゝやも月あれいさしきもさうりまのぬあせり
 いぬ方のは指も二人のことおつゝれはさし
 て神仏のつて今の橋をさうりまをさる
 めりけりちちのさしに女君は
この世に
 折小まお前をさし母君のさしつゝ
お前をたすけ給ふ
 にうりまお前をさし母君のさしつゝ
お前をたすけ給ふ
 さしつゝお前をさし母君のさしつゝ
お前をたすけ給ふ
 竹川さしつゝお前をさし母君のさしつゝ
お前をたすけ給ふ
 橋をの娘をあれいさしお前をさし母君のさしつゝ
お前をたすけ給ふ

後中納言

母君お前をさし
 橋をさしつゝお前をさし母君のさしつゝ
お前をたすけ給ふ
 うりまお前をさし母君のさしつゝ
お前をたすけ給ふ
 竹川さしつゝお前をさし母君のさしつゝ
お前をたすけ給ふ

竹川さしつゝお前をさし母君のさしつゝ
お前をたすけ給ふ
 後中納言お前をさし母君のさしつゝ
お前をたすけ給ふ
 糸りまお前をさし母君のさしつゝ
お前をたすけ給ふ
 の糸に後中納言お前をさし母君のさしつゝ
お前をたすけ給ふ
 とお前をさし母君のさしつゝ
お前をたすけ給ふ
 寄生さしつゝお前をさし母君のさしつゝ
お前をたすけ給ふ

次帝君

母君お前をさし
 橋をさしつゝお前をさし母君のさしつゝ
お前をたすけ給ふ

おまふ

母君お前をさし
 橋をさしつゝお前をさし母君のさしつゝ
お前をたすけ給ふ
 若菜上さしつゝお前をさし母君のさしつゝ
お前をたすけ給ふ

衆ふりしよふいあかぬおふりしよふいあかぬ
の君おまごにまつまても出らん芳らぬしよふいあかぬ
大好おまごのからつりてよは母は後へせんてやうあか
しやうにわらうまけうみの何れもあかぬまけうあかぬ
おひりき

若菜下考四十七 正月朱萱院のあきの山賀の試楽の案よ
しよ右のおぬい後おまごのしゆ入の君のゆえうのりんら
さうの笛きり一年十二月廿六日門一山賀の試楽の案よ
しよ右のおぬい後おまごのしゆ入の君のゆえうのりんら

竹川考十五十六 正月夕方若菜をうら君を訪ひしよふいあかぬ
よ集りしよふいあかぬしよふいあかぬ
あかぬあかぬあかぬのあかぬあかぬあかぬあかぬ
又りまのあかぬあかぬあかぬあかぬあかぬあかぬあかぬ

あかぬあかぬあかぬあかぬあかぬあかぬあかぬあかぬ
あかぬあかぬあかぬあかぬあかぬあかぬあかぬあかぬ
あかぬあかぬあかぬあかぬあかぬあかぬあかぬあかぬ
あかぬあかぬあかぬあかぬあかぬあかぬあかぬあかぬ

右大条

口部若 右中条
母九条考小口

若菜上考、小口たるありしけれあの人おまご
若菜上考四十七 正月朱萱院のあきの山賀の試楽の案よ右の
おぬい後おまごのしゆ入の君のゆえうのりんら
竹川考十五十六 正月夕方若菜をうら君を訪ひしよふいあかぬ

改申ぬ

竹川考の若 右中条
母九条考小口

○父

流しりか

藤原殿女侍

相壺帝の女侍

花教里まきむつち 平文抄本

花教里の上

この名 花のほろこ 夏の日のくさくさ

花教里まきむつち 源氏物語 井五 よりかれいけいん 相壺帝 のふたぢ
 もおしを院くれさせまひてのちわく 表 ちうしん
 ちうとらの 源氏物語 大お夜のゆゆ よ ちかきねて ち ちうしん
 ちうしん 藤原殿 はおし ち のち 花教里 ちうしん ち
 ほろく ち のち ち ちうしん ち ちうしん ち ちうしん ち
 ちうしん ち ちうしん ち ちうしん ち ちうしん ち
 松風 源氏物語 十一 ちうしん ち 東の ち ちうしん ち 花教里 ち

花教里まきむつち 源氏物語 井五 よりかれいけいん 相壺帝 のふたぢ
 もおしを院くれさせまひてのちわく 表 ちうしん
 ちうとらの 源氏物語 大お夜のゆゆ よ ちかきねて ち ちうしん
 ちうしん 藤原殿 はおし ち のち 花教里 ちうしん ち

花教里まきむつち 源氏物語 井五 よりかれいけいん 相壺帝 のふたぢ
 もおしを院くれさせまひてのちわく 表 ちうしん
 ちうとらの 源氏物語 大お夜のゆゆ よ ちかきねて ち ちうしん
 ちうしん 藤原殿 はおし ち のち 花教里 ちうしん ち

○大

若はふまきむつち

入道播磨守

えい道清の中ね

若狭守保氏より小の御若狭守のまじのうとあけらの娘が
 つきたるあいらたか一太田の後へて出さるもす
 りる人の世のひつめさき一らひと道信の御
 すてりりぬらうらうらもあつたのあつたはさ
 りあつてさくもあめあつてはう又あつてあつて
 うららあつてはあつてあつてあつてあつて
 此の備へ位長丁は
保氏のまじのうとあけらの娘が
保氏のまじのうとあけらの娘が

明石上

入りのあつてあつてあつてあつて
 母は仲勢あつてあつて

若狭守に保氏

明石守保氏 八月十三日保氏君小をさる

浪標保氏 三月十一日明石中まどうむ

松風保氏 秋姫君と母の尼君と一く京小のあり大井
 のあつてあつて

とつてあつて 十月六日京守の乾の町小あつ

保氏のまじのうとあけらの娘が
保氏のまじのうとあけらの娘が
保氏のまじのうとあけらの娘が

梅奈大綱

桐守保氏

つきたるあいらたか一太田の後へて出さるもす
 りる人の世のひつめさき一らひと道信の御
 すてりりぬらうらうらもあつたのあつたはさ
 りあつてさくもあめあつてはう又あつてあつて
 うららあつてはあつてあつてあつてあつて
 此の備へ位長丁は

雲林院の律師

柳孝源氏君 九四 秋源氏君を律師と信ずる事より秋の世も
こまひうそらや律師ふまうてまうるを母は世の事
との律師のよりまう坊して法文あつてまうる事
そわやうて二三日とありあつたふありあつた

桐壺文家

源氏君の母 律令所
母 桐壺孝ふりし母の事よりあつた事
源氏君の母の事よりあつた事

桐壺孝ふりし母の事よりあつた事
口へ孝源氏君 九四 夏病少りて里にまうてまうる事
律令所よりあつた事よりあつた事
桐壺孝の事よりあつた事よりあつた事
あつた事よりあつた事よりあつた事

○父

佐々木

常陸文の女

未摘花の母上

常陸文の女にりし母の事よりあつた事
あつた事よりあつた事よりあつた事

大郎の女

右小

○たぐ

桂樹孝にる事

女

源氏君の女 右名何れもあつた事

くまはよらふふいふふのさう〜いふふのさう〜いふふのさう〜
けい〜いふふのさう〜いふふのさう〜いふふのさう〜
二月廿五日 常陸君廿二日に常陸守の御事あり三日の夜に常陸に
常陸守の御事あり三日の夜に常陸に常陸守の御事あり三日の夜に常陸に
常陸守の御事あり三日の夜に常陸に常陸守の御事あり三日の夜に常陸に

○大后

楊姫まにるの 中ふ歌

常陸八家の小方 大后中其の四母

楊姫まにるの 中ふ歌
くまはよらふふいふふのさう〜いふふのさう〜いふふのさう〜
けい〜いふふのさう〜いふふのさう〜いふふのさう〜
二月廿五日 常陸君廿二日に常陸守の御事あり三日の夜に常陸に
常陸守の御事あり三日の夜に常陸に常陸守の御事あり三日の夜に常陸に
常陸守の御事あり三日の夜に常陸に常陸守の御事あり三日の夜に常陸に

父

常陸の介れ小方 是母君の四母中其の君

常陸の介れ小方 是母君の四母中其の君
あねぬあ〜いふふのさう〜いふふのさう〜いふふのさう〜
あねぬあ〜いふふのさう〜いふふのさう〜いふふのさう〜

しうしうあはれさうまはかのいしうあ仲の君と
てハの家に住ひて浮舟君をうしうのらうあめはうしう
めてをあれさうま由山んくねハ陰奥の集あうてそ
のあふりく又常陸の介なうりたれいしうあふりく子殿
うえんういさう十五まうあにのあるま

た中毎

権中まうしうしう

毎尾

毎の君 毎のあやめ
母柏本君の乳母 権中まうしうのあやめ
けいあふりくはうしうあふりく

権中まうしうしうあはれさうまはかのいしうあ仲の君と
てハの家に住ひて浮舟君をうしうのらうあめはうしう
めてをあれさうま由山んくねハ陰奥の集あうてそ
のあふりく又常陸の介なうりたれいしうあふりく子殿
うえんういさう十五まうあにのあるま

中まふりくあふりく海らうの柳大綱のあめれとてまうしうハ
の字と姫君たちのあふりくの母方のどらな中毎とてまうし
けらう子なうりく年浪をさうまあふりくねの姫君とて母君も
うせまひてのらうの殿位あふりくあふりくあふりくあふりくあふりく
とてあふりくあふりくあふりくあふりくあふりくあふりくあふりく
たうねうしうしう十五まうあにのあるま
しうしう十五まうあにのあるま
甲巖まうしう十五まうあにのあるま

○竹川たを

竹川まうしうしうあはれさうまはかのいしうあ仲の君と
てハの家に住ひて浮舟君をうしうのらうあめはうしう
めてをあれさうま由山んくねハ陰奥の集あうてそ
のあふりく又常陸の介なうりたれいしうあふりく子殿
うえんういさう十五まうあにのあるま

按長云竹川のたをはしうしうあ仲の君とてまうしうあ
たをはしうしうあ仲の君とてまうしうあ仲の君とてまうしうあ仲の君と

二位申付の由方

竹川きふり（敬請の旨）申付ありしと二位の申付ありしはてそ
りしと九右衛門の旨いすりとえしれしとありしと申付ありしは

